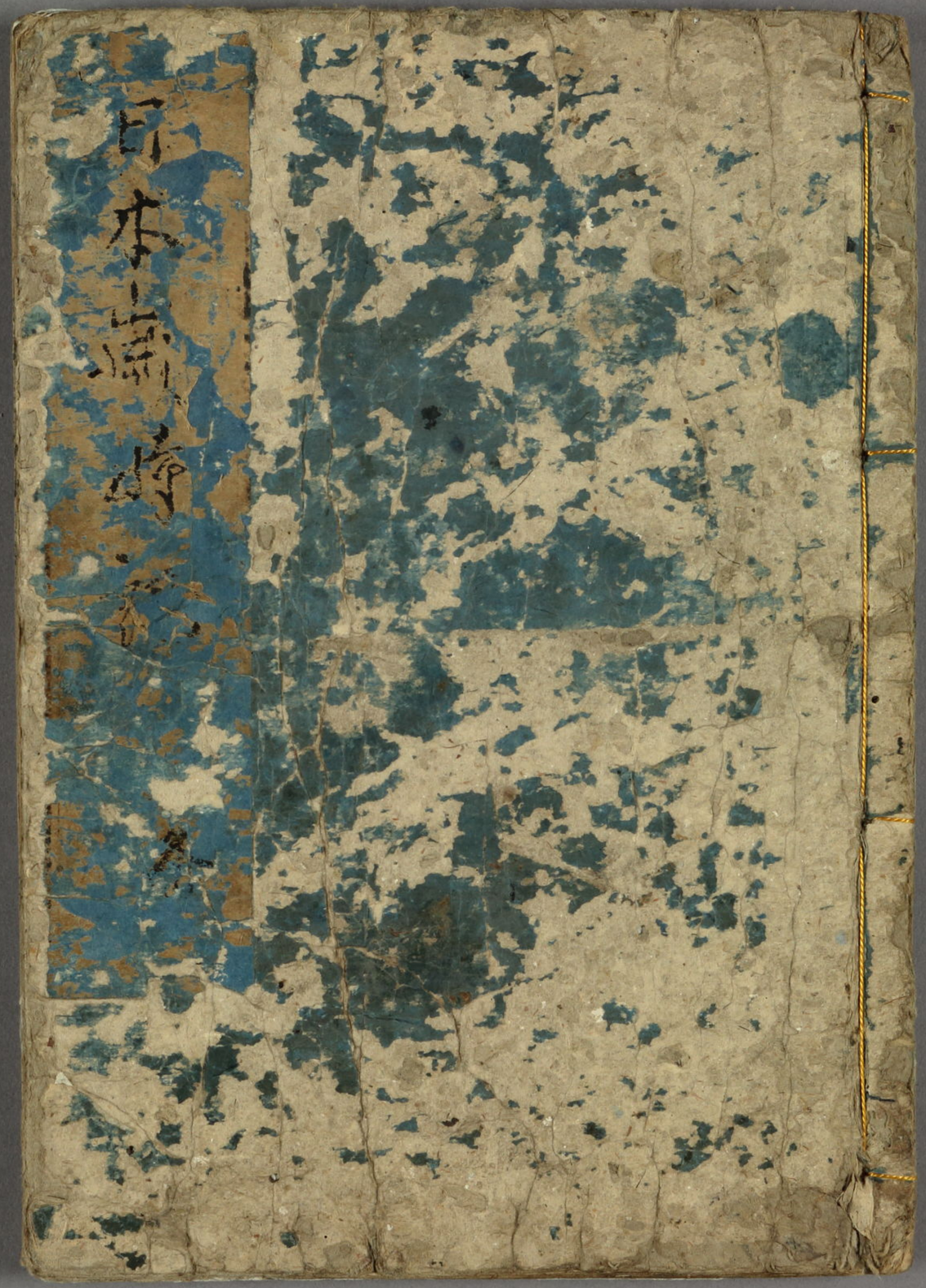
印本崇峰

日本歳時記敘

伊者氏命羲和欽若昊天曆象日月星辰敬授人時其欽敬如此其故何也蓋聖人推測天道治曆明時是事天治民之事而治之法也天下之叟莫先於此莫大於此堯之初政未及他事而先之者良有以也振古以來言曆象者世有其人屢改寖精靡有差貸唯如授時勤

民曆家之所未言也如夏小正月令可謂庶幾乎若夫玉燭寶典月令廣義諸書亦庶乎爲授民敎時之一助然其所載不純粹者亦夥矣可謂博而雜也本邦自古未聞言歳時之明且詳者故民間往往失其故實而錯傳妖妄之說者居多識者憾焉竊謂敎民授時在其位謀其政者之吏而非吾曹之所宜議

然如民生日用雜細吏宜雖微賤復可言豈爲僭上乎不佞夙有志于此然衰朽之餘齡亶艱考索嘗屬家姪好古命編録於事之覈實而便乎民用者書之以和字家姪頗聰慧有編削之才彼之攷古訂今闕其疑愼言其餘者愜我之素志書稿屢換而輯録已具於是乎予暇日逐條再修補之書遂成編矣嘗恨

聞見未博考證亦疎而遺缺者尚多誌
誤亦不少後之學廣而聞多之君子改
而正之則幸甚

貞享丁卯勉秋念日

貝原篤信書于筑前花津之損軒

日本政府図書
宮城文庫

目安案時記凡例

一此編もとより心乃やすらへ為にもとめ
みるこゝろまくらとすべき事三百六旬乃所
家雑事とを為こゝ乃文よ為するとゝ我
國乃文字よりやまと文字　國乃事とゝ
をこゝろみるまこゝろ也
いにしへ乃元と並徳よ永さんとを為ず
こゝろ乃事と切さを後嘉てのこゝ
乃を民間乃婦乃男女の如き案時乃事
宜と為こゝめんたなるものを

一 案内の者を屋敷へ召連れ
考へ合せとの事也と稽古まつゆ弟の者
出かけ申こと又は申ハ
世俗此度と申ハ
一 同じく乃事宮之民屋日用下役ハ
書にのり而なし紙ハ
これと志ハきハ
世べし 第五月
本郷乃民俗より
事のことをとりくさ

一 家内よりこと屋敷乃役神宮寺の者の
ゆ世俗此度と申ハ
乃こと此有世之事
こたゞ屋敷程事
はせこゞ
わこと
なのいとの
いり迄
一 延年中乃御祝
而こと祝

書よりはまびゝなり　申紙の有実よりこそ
げにあゝ人をこれと考へ知べし　今又これ
と云ふきゞ賛をもるべし　長月やまひと
いとむを元をもるべし　えしくれいをもしは
つまは江戸　景年の儀式を示す云
也ゝ也　今民間よりの家号の事
如つまゝこと乃ゝ略ゝ　ゝと云ゝ
如これをもとと云ゝ　めんがためより
一　ば編と集録せんると叔父検行義乃
事よ今をり云ゝれをと事をしより才はゝ

なく儀式ゝ　それを枕詞ゝ　つまとくく
うりてたゞよやゝぬゝ　ゝとその中之
かゝるまぬ也ゝ　ゝねくゝ　ゝひゝくゝ
乃原神の文ゝを　ゝんゝて書つゞ年
を絵ゝ　ゝれゝ　ゝめ文義乃
刪補とゝゝ　ゝ書ゝ　ゝ云ゝ
あれゝ　ゝゝ　ゝゝ
しゝ也ゝ　ゝくゝ　ゝのゝ
ゝゝ　ゝ也ゝ　ゝ編ゝ
乃ゝ　ゝ人ゝ　ゝ

ちゑさんためなるべしバ後のよまむ人文理ハ
やしなひとかく援事なるべし

貞享丁卯末夏望日

筑州晩出貝原好古識

日本歳時記巻之一

損軒先生刪補
貝原好古編録

春

漢書律暦志にいはく春ハ蠢なり蠢ハ物の動き生ずる皃なり○和語にはるといふハはるといふ義なり気の発してあらはるゝなり又はるといふハ草木の芽はるなり○春秋元命苞にいはく春ハ蠢なり四時の一時九十日あり四時これに准じてしるべし

春は四時の初にして発陽の時なり古人の語に一年の計は春にありといへば春のはじめに年中なすべき事業をさだめいとなむべし四民ともに其のつとめの

と初め動めべし過くしては穴を明と先ずす
なりしかるに其の湯の初めて熱すれば沸騰
沸て泡とうぶるうちこれを殺すこと勿れ
素問にいはく春三月気と象て万物いまを栄ふ外に向て生長
被髮緩形と緩にして志を生ずべしめよまして殺す
こころを生ずべしいまを寒さ厳しく冬ごもりなれば生長
を絶すれば冬ごもりして蔵を生ずべし
肝とやまり夏を長とをなし
遠を生ず腹にいはく春月動和の時園林宮室を設け

一所に拘泥して滞情とのべ生乳と言すべ
久しくして元ざして鬱滞と生すべしこれ病
とるに足事なり生
食医薬略にいはく春は肝の時なり肝ずれば病
肝の臓に入れば不食穀の肝とくるしむと忘れ
とやまんすと知るべしなり
平食方にいはく春七十二日 青牛乳と深く砂糖を加と
食するとうぶる甘味とまして脾薬と薬に
月令広義にいはく春は温なり万物温暖の気物と多
飲食べし沸き乳と食して沸乳と深すべし

湯より一ケ月ばかり以前又難波とてうしの衣服とあ
ふりまろうこと禁ずべし
春の生物よりいとく春の万毎朝酒と称して一二百程
かうとべしまた和泉守より難波より酒一
樽八膳の下及逆と渡さるべし風毒脚
毒とのうこと也
毒の書に農書にいとく毒の万郷邑とてうつ酒と食う
事なかれこれの中より能あり人と言ふ
月令廣義にいとく毒の万大熱の物と食事しかる
小蒜及百草のん芽と食べからず

四月

直義八四月の誤か 不因一月と言ふ四月取る者五二之義 尚書四月の中 ○海後大全 安清 氏曰
又雅紀風一月為四月 唐虞已然 舜八四月 ○四月乃異名 孟春 孟月 孟夏 孟月 孟秋 孟月 孟冬 孟月
乃和名を睦月と云 清涼の奥後和小いとくたるさわ
ゆきく ふむつひ月しとうと略せり

元日舜典にいとく月四元日舜格于文祖羲沈の月四八
四月也元日八朔日也と記せり之を唐虞乃間沈より
元日乃名行と云世日とこう元と云ふ漢書より重人考暦
数に四二元と見えたり
三元といふ玉燭宝典にいとく今乃世にいと
三元と称して元三と称と後漢礼儀宜う偽不出
案乃始月の始日代始元と云ふ

[illegible]

○除夕より家とやらとく寝ずすり寝ず明る
元の初より起く新年をしろく盥洗し髪と結浄
衣と著 [illegible] 礼服と著て威儀
容儀とかいつくろひ齊戒し香とたき天地
神祇と祭祀し [illegible]
[illegible]
父母をまつりて人に出祖の祠堂に前より伺候し
婦礼して事なく家を通ずるとを伺べし

孔雀くゝ毒虫とあむ

和国乃風俗て鱠とゝの松竹鶴亀のもとと作

てすゝ栗柳海藻海鼠こうん如ゝ色ゝ

米粉をまぜうゝ紅くこれとなむ菓初よ

来の雲客ゝを元とともむさと蓬莱

蓬莱ハ仙家ゝ生へ

ゝうゝ仙を毒鱠ゝ保ま菓ゝと鱠と仙

毒鱠てくゝ付くくゝ

後ゝ見てゝ仙

毒鱠細生菓ゝ

よ五位殿人五年鱠と上ゝすとゝゝ

やゝ乃きてゝやゝ

合酒よ及ぐく雑煮と祖先考妣の霊前ゝ

酒と献ずゝ

あり仕へさゝ人を伺ゝ

祭ゝよ酒てくゝ

ゝを冠ゝ乃ハ

と祝ひくゝ

のミ又手洗にすゝぐべし
ふりて嗽し其後餅にのぞみて祝ひて奠
海菜牛蒡薯蕷称栗すゐ大根いるゝし
元日にいはひしむかしは事のりの延喜式にも見えたり土佐日記にもいはひしむかしのことどもしるせり
是なく菓子合せ餅にこれを名付て雑煮と
いふ我國の風俗にて此事に餅と
他のことく祝ふ此日より三日までのまゝ餅とす
ともかくも喜と祝ふことたふ人しかるべしもて
元日に膠牙餳といふもの荊楚歳時記にのせ
立春日春餅をもちゆる事月令廣義にて

又あり又屠蘇酒をのむことは荊楚歳時記にいへり
むかし人ありて草庵の内に居り毎歳除夜
里閭に薬一貼をおくり嚢に入て井中に
浸さしめ元日に水よりとり酒樽に入て
付て屠蘇酒と号す家をあはせこれをのめば瘟疫
とやまひなかりし屠蘇の字を蘇とは
つゝしみ邪気に人魂と
蘇醒せしむるなり屠蘇と名付たり
にかへるより李時珍が説に蘇は鬼の名
此薬よく鬼爽を屠割とぞ又四時纂要

屠蘇を孫思邈が屠蘇方にもとづく我
朝にては屠蘇白散とすむるなり是は
乃治字弘仁年中よりはじめ出し
元日ふい屠蘇散と用ひ二日ふい白散と用ひ
三日ふい屠蘇散と用ひ又幼きものは
茶とゆれば先づ[illegible]て屠蘇とのみ都方くい
嚴を先えば除くに屠蘇とのむ事を
[illegible]書よりこれ後漢の書磨杜蜜はく
わうてはりく獄中にて獄中にて[illegible]が
獄中にて元日よりあひ酒と称くいそく正月

後小起ごれとなくくまび酒[illegible]
[illegible]
又成又粉の茶具乃称よりぬ色炮屠蘇
屠蘇無ふ乃先書。まく[illegible]の称にて屠
蘇儀少年。これ右乃ちさと称まて去るる
屠柳南の後ふる正月屠蘇酒とのむ事必
早幼ちちむ色幼よ石逸と敷ちかり
月ふ元日ハ一茶乃姫ちり色幼の分とはよ
せすんべあるべくして[illegible]
[illegible]

如の文作り

○今朝我いまゞ門ざる何色人ごと大つ三郎し夫
三郎屋の図像とかねく板よ新て紙よすりに
と拵て人門戸とたく引くと寄り物弁
をひろく寄多し故郷ごよとろる也
○とる美水きくのむるすあり豊後国のいろ
ゆやまふいろろ乃十二月の土用ゆよ水
可御生氣の方乃井と封じて人よ汲せすもの
日代より五ツ土瓶小入く如まつきくを所るのり
三月の日美水と領ゝ年中乃秘宝と深くとる

かゝ所事とまるひてわるゝふもひの井泉水く
てくゝろろとのむるを作りてやまゝ
秋よくあバ美水といつ形へ

○又歯固といひてもらるゝやうむるよ 俗よ俗と後
あよ後俗く稗す 稗ずるよ米天文 米天文考之十七解下
乃細屋よいろく麦米移俗成 成井せ浅へ 行俗 円 物 熟 蓋 指 干
戦国 こしといくく巡ハをろ
俗解の熟鏡ゝ形よ作ゝ月ゝ
命ゝとろ有よ歯といつ
歯固いろひとろむ
ゆゝよむふ河ゝ古今集よ入ゝ
あゝよやかゝみ乃ゝとゝあれゝつてろ

これゆゑ手を世にしら家を誦することさかん也世俗
閏餘より月を入てしるしいふ延喜の頃の御時
朝廷の国より大嘗会の比べきまゐらせし
大伴氏上ありて悉の音なり 比べハ賛也大嘗会の時延紀に見えたり
これをまうしと賛といふ又をしへの字よ読経と謂ふ言
への字にかりてよめるべし
今世まてを称とありてわひこんといふ
かみのもとなるかしこや
ところにも元日に謄牙餳をくふ事なし
膠国の義をとりて歳時記にしるせり
くさく後漢の人崔寔を添しるせり

周の大宗官長に置の朋友諸生行くて年始の
賀をのぶべし又庶人ハその次の月年始の賀をのぶべし
行て賀しその友どちも賀をのぶべしされ
ど此月ハ親き人のもとへいたりひよりかよひて
よろしくむつひ志たしむべし故に此月の和名を
むつまじ月といふよし前にしるすごとし
元日の朝賀ハ漢の高祖より初まりしよし
杜氏通典にみえたり我朝朝賀ハ
そのゝち神武天皇の御時より始めて行
よし旧事本紀にしるせり

○今日屠蘇酒と祝す也 屠蘇と解と異説紀之
みえたり 桃を移す事 みえたり 仙方に屠蘇
と元日養赤酒と服し 邪を用ゐる 体活し 悪い
刻て 楚と 病と 邪と 解 疫と やまひとを
祓 寛の 月令に元日 梅花酒と 祝と 屠と 邪と 祓
もとより 月令 廣義 小 く 元日 飲酒 皆
日 祝 事 又 除 邪 と 庚信 詩 正 朝 除 屠
酒 新 年 長 命 酒 と 紀 也 り
○とはもち月 まくつの 松竹 と 立て 注 縄
とをうつの とを 男 ゆづり 葉 庭 ごと かざ

事 あり 世 後 四 条 の 時 ひとり むしり 主 は
海 こと 七 人 し 嫁 の 家 屠 を 封 戸 ある ふ ふ い く
民 戸 と 分 れ と む し 一 町 の ら と 文 史
は ま り て つ と 生 て 一 ば 門 あ り し
あ り の 中 に 嫁 の 家 と つ り 作 主 門 な る
べ き に あ り ぶ そ の 門 に 松 竹 と 立 作 り 松 を
ふ こ せ と ち ご り 竹 い ま る 竹 か ば り 竹 を 木 ま れ
ど 年 の 祝 の 祝 る ま し て 作 人 し 男 ら れ ゆ づ
ま と い 海 ど ま り て 雪 霜 も 去 ま 主 の か
れ い 主 久 縄 ま か ざ り て 祝 れ じ る ら 作 る や

すゝむことゝいふ名よりして其野州の結ひと結ひゆづりえて継来けり
かゝりし神代紀にも同じく見え給ふ本紀は四季に縄と結ひて志めん
縄よかゝり又へはすべてこれらに手を用ゐる人へし枕草子にもゆづりえとうち
たゞ其のかなまもちゆかりて見えれど〳〵へりあひけるすりと見へたり
志め縄とは神前に張る縄よりして縄の名ことゝいふ縁
えんをとの神り左左清浄なるを示すれ左り志ら紙
そろへぬきさしれかなることろなり此書は天照大
神の天の岩戸に出給ひし時志りくめ縄をそ引
きしよれ今の志め縄なりと清浄をいふ也よ
よりく神事の間はかならずひくる事なり縁の織の
世によひくることも正月の事とにいひふれる
事てなるべし

ころ紀よ素盞嗚尊の南海へかよひ給ひし時宿をと
ご旦将来よかりし給ひしれどもしなき蘇民
将来戸をとかしまんそ後ゝるいるそて巨旦を
ころしその家をとなりし後の世までの
志るしと世んとて巨旦が釜よよそすむ松
を年の始よつるよし晴明の簠簋内伝よ
見えたり志かれども不経れ説にして取ず人
ふかゝずたゞ世俗の説と以て正とすへし
又むかしは松と竹あ立る事ふや箱
家ゐ平かれ立ますよ飾さとりなり

きさらぎまでみやこにて留り引のこしてかの鳥乃
ちしぐれの門松　しりくめなはの淺[illegible]
日本紀纂疏云、左縄端出、此縄不義、又紙垂不祈、縄為畫
之義、神道以左為尊、左者陽、陽清明之德
也。綯縄示不穢、其端出之義也。是以作為
屈節之處、以重[illegible]
此三也。即注連是也。上紀乃縄よりはじまりて
ちくいづるまにむすびなれバ、かくいふとぞ
七五三とかけるは、天道は十方に行て成数なれば
ひだりまはりにするは天道は左旋するゆゑなりとぞ

按ずるに荊楚歳時記に正月一日畫雞を戸上に貼
し葦索をその上にかくると見えたり。今の俗これハ
もろこしをまねびたるハ此俗の門東なり
まや又門松に炭をとりつくるハ本草綱目に
いはく、除夜立炭於戸内辟邪悪と云
是等考ふべし

○今日平旦に八風を考て歳乃善悪を決する
事あり。八風とハ八方より来る風なり。風南より
来れハ大旱あり。西南より来れハ小旱。西風ハ兵乱
あり。西北より来れハ是歳戎菽饒なり[illegible]

一年乃天運と所謂の風と云へ知るべし其理也
これ妖祥よりも作すべきなるよりて作る
○ちろりふる今日桃符と改換る事あり桃
符しい桃れまくれとちろりとよりと
戸よ掛くろれと年の始とふ換る赤よ紙把書
桃模義符と書鄭玄神荼を作りて山海経よ
いとく海中よ鬱壘山あり山よ桃木あり桃下に
二神をまく百鬼と出て害ふ今元日桃符と作
やうの風俗遍ふ也と教へり山海経とふ
異なりたれとまたれ桃符乃説をして作とふ

をもて掛とるよ事ふまるよ桃也百技木にして
ふ木の精也仙木なり味辛氣苦ふ
厭伏とあり元と此とふ邪氣
邪氣とちろふ
ちろと作ふ伏とひとと邪氏乃むり伏特
強ふ英泉平桃よ桃樹小立ちろの桃木
三ちと元ちく泉ふ日精也と紙手紙ひしよ英泉雪
軍門逃還地元桃と用ちく鬼と書ちく縁たちろ
ち意ふ事紀よ見元作ふ如紙ふちと作黒
図ふと桃符とかくへふ事ふや 朱文公書云

居之桃符いとく愛君希道泰憂國願年豊
桃の美うるはしきは元旦よりはじめて
俗多の家は米子元旦より
いとく道遥前聖統朋誤遠方來　今又学の文字
乃桃符よりはんはは修業思時敏。進德欲日新
うつのうつの影元旦のはじめて書へさう
○今日字と婚書す　唐よこれを書始めるなり又王羲之
月紙書と用ゆへしとそ又よりく月往月來の
元正貢祚の大族告辰微陽始布馨無不宜和神
養素又こゝろ一所とめて俗と俗まてを書へし
俗は紫旦と結と紙旦字と書はし紙筆と称と

紙筆とは唐の時の紙筆と称するなり又紙筆紙
ものは紙筆の結と紙筆と称す
徽紙筆たゞくもの
紙乃ゝは俗旦で我　邦乃ゝくもたる風俗
也あゝ元日乃奇　後指遣ゝ小大君
いつはねゝ松乃ゝ　ゝ　延文百年ゝ大納言乃元
ゝゝと乃ゝ　ゝ
いつ乃ゝ小年のとりをとりてゝ
ゝ原のゝゝ　後指遣集小義乃ゝ
ゝむ乃ゝ一百とてゝ
ゝ乃ゝ元日集ゝ紀貫之

[illegible]

[illegible]

[illegible]

元結が巣旦乃賀

一日今年始一年事定薬深百度変意

無一年同

正月新玉の元日の祝

燈作琴中一巣深春風吹入屠蘇千門万戸

暁々日。紙把新桃換寿符

宋義之の歳旦は始り

岳間無賀客早起但如常桃板泥人擣梅花漏

巣香春風回矣語春氣卜豊穣柏酒何曾飲

人康寿自長

○常の紙史と業ゝ武家ゝ[illegible]ハ

今日よりもとゝ礼服と[illegible]初と[illegible]

[illegible]一年乃金砂と[illegible]ひんとなるべ[illegible]日を

かく屠ゝ次

○世俗ハ今日終日屋中を掃除せず[illegible]

[illegible]湯[illegible]

又雞組より國に傳元日より五日まで囊にて
漆の匙鞭にて移花をいてり石をもて油く
竈をあらふことはこれ古人の教にて竈の
神をもてなせりもろこしにもかくのごとく
傳ふと見えたり
○七夕常の如く燈を燒く竈に燒を燒ずして
○今夜夷殺の爻をとりとをいはず命と掃ぎるよ
月令廣義にみえたり
立春は正月の節なり大寒の後十五日に相見に指
と立春といふ立春は始建也元日は二月の日に始也

立春は正月の氣の始なり一年に天運先より
ちゞまる時なり也はは油くちんでんを沒めるの始と
正くすべしもろこしにはは春とすめ樹
粥を食し春餅をとひ桃湯に浴する事か
中庸月令廣義に見えたり古書に
同 古今集に賀之
神もちてむとひとりのこれるを春を門
ふりうせやとしてん 同集に二条の后
西のうらに春を祝ふうをひとこの春
あらたまるやとしてむ 同集小源八まさすを

[illegible]

新古今集より撰改大改大臣

みよしの山をこえて白雪のゆきけ

[illegible]

[illegible] 同集より 像成

きふてゝ[illegible]

[illegible]

曹植の[illegible]

玉燭俗[illegible]

表年春臘尽星回次月建寅梅花将

柳条偏思越郷人

英[illegible]林の立春の詩

五十年間祇自漂浪来歳月更茫然余生業

度看新暦又致[illegible]風減一年

張[illegible]の立春の詩

紀回暦晩冰霜少春到人間草木知俊芳眼[illegible]

生意満東風吹氷緑差

○立春の詩

をゝこゝの黄鶯[illegible]

たゝとゝん黄鶯乃[illegible]

[illegible]

ひさしくして園あるやど林ちりにおいかゝ
かゝざれどもその春うつくしきすべし梅よりうまで
なくてやまん杜鵑を又多くしてなくうの
たぐひ見侍れ乃かんれる有るべし
○年乃始よ事ぞの破魔弓とて射る小治ぶろ
せうを武と云れざるをなるべし但むし毛
射礼とて正月よ国衙裏ふくゝ弓射る事乃ありし
なり巻頭天皇社御宮よ大国て正月よ
弓とりさしむいる事古きふを又えり
かゝるをとゝるようけくゝたくへい年乃ぐ

年毛せる人を弓と射くしるや又新編考
日本乃部ある毎ふ正月一日弓射戯すと記す
○又毬杖うつるあり見宮元り眼をうりと
とる法ぶたぐ事の戯玩ぶぐ侍るべき
孫昭神中物十云十名録黄帝取蚩尤所
毬之今毬杖是也此例漢土年始用件の
国中毎年事日本国学芸例年始お
毬杖云云此事乃くなるす兵古きふを
乃人之次附会の法ぶるべ
○又ぶれる毛乃わくはれあたのこゝいひて楽

義経は抱とつきくゞりあり世後四答
かいくく見地されきものく蚊くいれぬまゝ
なひるすゝり秋乃くめ不情蜂といふ虫ゝ
て小蚊とくるまくふ拍子あり此のことくいへ続華
みなどとんだうからかして抱をつけう
これと拵ひくつきあぐまい蔵る河とんだうかへ
つまれやうかりはゆく蚊とおくまてしんあり
こゝきのことくはきはるなりとんだくの拵と食ふ
○又ふ奇業といふ事正月よりむくまて
正月中ふ百月乃ひなまい踊歌とく京中の

男女おくくとつどへて関衆みく狂言とうしく人
てまらせくまくまくまり　中華ゝ乃代ゝ正月十六日
数書ゝ乃ゝ　長安ゝく踊奇せくまくり潜夜
ゝ乃ゝ原氏乃拍子漢人踊歌と奏せ
ゝ乃ゝかゝ乃ゝくれ事くくゝ海風ゝ原ゝ
求ゝくまくまくゝ奇業乃狂言とくゝひ
ゝくなり踊奇乃舞人業春楽と奏せ
ゝ万業楽くくと蛙ゝくまり　世後四答ふ　今ゝ京秋
みゝ喜乃拍ゝ業楽ゝて西洲　さゝくゝと業
てくくひ舞おくくまくまくゝ西洲ゝくまくまくゝ

二日ハ犬日と猫日とゝなづく東方朔が占書ニ曰一百
と雞と一二日と猫と一三日と猪と一四日と羊
と一五日と牛と一六日と馬と一七日と人と一
八日と穀とする日晴る時ハ生ずる所ものの
ハ久しく時ハ死なんとすれども死ぬ乃
生化自然乃妙理あり如言といひて天地
乃大形ハ遠と推量るへ暴論とて海とうるよ
ゆゑ海よわ〳〵ふ場あり事なるゆゑ柱奠
ク給ふ元日ハ人日未ハ二不清時といるへ俗説
とかりて天地乃河図方接乱して人猫

天地乃河図方接乱

○今朝印乃刻ニ起食時ニ屠蘇と食ひ
冷酒とのむこと昨朝乃ごとし又温飯と食ひ
温酒ハ乃むべしこのゆゑ新年乃始ニ
所おこと今日明日行こと禁すべし
○今日武蔵ハ馬奠初あり これと越る初と云ふ
又るの初とあるハ 又弓射初鉄砲打初あり 農家ハ
河やまりなり
さてさて初ハ高山あるひ初と舟
八さ形奠初とて
○世俗ハ五年新ハ男ハ水とかるゆ

あんにゐ永禄の比河波乃三郎右衛門
う姫と我家乃親戚より妻あてせしより此戦
と前初しとや年ワ乃ち岩無氣の蓋なるよ
まうなくしたいあまとなし男とそこるひ病
とまで武そ口御閑家より後ゆそ
酒食と客そ世辞抱して孔よ及ようれ家
毛号のいやしき戒とるなくうす又見もこ
これと梦びべし

三日今年仏食ところのすゆ又此日乃古し元日よ
ものとなるよまして雑煮と食し長福

のむ奴婢を又ちり
五日宋伝あるいは人そしは領内乃農人多く来賀す
ゆ仮饗酒肉と与ふべし一年の初礼なり
あるよ多く酒そ美饗と与ふべし農い毛民の
ゆなりるれ稼墻乃功ふりて男とやし
なるの事なれい早賊ちとくたるるふすぐ
らに毛宋地とたるの事と徒し此古年代
農功ふむくゆくるり又道路よ旅人多き
そ太平乃為なりと古人をいう

六月　清涼

七日　人日といふ　仏教にいふ人身は万物の霊なりとて人日又霊辰ともいふ人は万物の霊なりといへるなり和語よりいふる人の名称の初めより今日七種の菜羹を食ふ七種の菜といふい奇なり

せりなづな御形ほとけ乃座もそれすゝ

去ろこれろ七くさ　又仏耳草・鼠麹草ともいふ　仏の座　七種の菜羹を食ふ　すゝしろ　かぶら　とうな　すずな　ごぎやう　はこべら　ほとけのざ　これは若菜なり　世人多くは若菜と為す　一説に二月の節句若菜を摘み羹に入れ食ふ　又云夢華抄に云ふ　人日の羹菜　宮廷民間今日羹菜を食ふ　唐書天宝中に人日に羹を食ふ　延喜十一年正月七日宴に侍る人に七種の菜羹

代とて人々せり薺蒿　荠菜　肉芹を正月七日七種

いとく美味　これをくるとそり　三月三日の日食は菜羹なり　可与元辺初之三月

○又は日本一中国と唐土　中国方と望めば清湯の氣

と都の中とは遠く煩悩と障りと乃御なりと弥縫

菜花宮よりこそ書を元ち人日れ初よりいとく命婦

○世後間今日今日　今日はやけて焼るとて

まつのいはるとと馬乃性のなとに天に印象乃

世ふるあり又天代廟也誘なり塩の出いちり

とりかへ又あり又礼記に書と東都ゑむ〻て玉ゑ
七夜をとりもちと足えはり又白ゑるとまゑるといい
ゆりい湯乃弧なり書い書氏ゑ玉ゑくゆゑ
ゆゑまゑくこゑのものゆゑ氏ゑまゑるゑもかへ
ひくゆり中百月吉月ゑまゑるとゑ人年中世
ゆゑとくゑふとゆゑ又ゆゑあり今れりくゑ乃ち
ゆゑゆゑふいこれまくゑゑゑゑゑゑゑゑ

通り人日寒梅二格遠詩

人日題寿芳壹遥懐故人思故郷柳條弄色
不見見梅紅波枝憶謝朕分玉壹蕩矣所

擬百憂仮千慮今年人日穴思明年人日元何如
一臥東山三千春豈知書劍異風塵孤蓬道路二
千石堀商東西南北人

○又東路の人乃信よ正月二代の日郎よりく
山松とりくゆゑあり太見くゑゑ

五月日に陸人又ゑまゑ乃なりゑ代の
仁兎に行くとひゑ

春乃世と珍へよそくゑいゑひゑ初ゑ乃松代
玉氏ゑゑくゑ　けゆふ松ゑ雪世ふゑ玉ゑ
ゆゑ年ゑゑ乃樹ゑ玉ゑ人乃張ゑゑふ陸人

ゆゑにくすしの祖けるものしるし 抽ちろ之薬勧善門之業
首打伝授男七女二ゆゑ 為業飲食と伝はりしるし
てもかくの事乃伝ひしるや

八日 俗醫家初め薬師佛に祭祀とりあへ 今日その
服とりもちて宴と設く又毎月八日薬師佛乃
たゆ不素饌と食するものあり 是氏は
伝ふまゝひあやまりなく薬師佛と醫乃祖神と
なく祭るなりもし神農をもし醫薬と教
ゆゑ今世之俗乃醫術を神農乃末裔代々醫乃
おくへなり孫と称ねだ神農氏こそ諸之醫乃祖

神ゆゑなくまれまれまれまれ 倣傚乃書に神農と
らんすと怪奇し醫徹乃書に神農を素問と指ちとり 故俗と
醫術ともろ人をなり 四邦ゆゑ神乃世之ゆゑ 長名命
大ゆゑ命醫薬と之ゆゑ 治ゆゑれとし 倣ゆゑれこと
系 四氏醫乃ちめなゆゑ 之べこれと 之ゆゑ義之ゆゑ
宮ゆゑ 神農氏醫書乃中之一ゆゑ 書乃 薬
師佛乃祖乃之 伝ゆゑ 醫と祖とし 一戸
つゆゑ八日ゆゑに素食ゆゑ 薬師と祖とし 一戸
まゝゆゑ日ゆゑ ゆゑ伝ゆゑ 之ゆゑ
多ゆゑ 多ゆゑ 薬せと之べし 一ゆゑと 用ゆゑ

十一日　武日國信濃と芳谷と芳年と芳と用
しるり芳と又柄と彩芳　芳と用ひ八丑柄
と彩をひるのす信濃ひ信えしりアたサハ
大獣流公乃御用ひなる家ハ丑盃玉辰の年ら改て
世日と用ひ猛猛と彩るる南部用今年中紀事たま
みさえ八乃ひたり初ハ元治年ゝの三月彩ら
を紙ひ書ひる芳柄中ら家初より猛猛と彩る
事和國乃信濃ひり父母祖先乃彩盃の家て
猛と彩ハ和國武用信ひ丑八御宝ひ用ひるるへる
知柄まさびてと芳ひ元年とハ紙てかぶり

たるるたり猛芳柄と芳ひるるい猛猛なれの
ひ〳〵し他猛と芳ひる車ハ古紀ひて大獣ま
流乃時と又我場ひて初ひ御ひ敬乃心を新
て猛とまつよし虎紋猛ハ入てりされた治
世ハ猛と芳ひるるいしまじを御と乃び我國の
て西武田の家ハ御猛猛柄ま先祖より信
ひ猛猛と彩ハ家め名ひる武士を御猛柄ま
乃引崇と言め年初ハ食柄ひとるる人ひ
しるるるとうや

なてたのハ先祖より伝りたる童謡なれハ神
家にもてあつかひ侍りと先り者れハ幸乃縫と云ふ
なそらへて参るべきさるものあるべきさまでも國信
みくに武士ハ風にあらぬ世ハ信よ者さうひてすなり
元風信よ者さうひてすなりのたるすあり何ふさるのか
日記なるへしハ孔義よ喜るのたるすハ国信ふ
べうしん

日本年号附紀巻之一終

日本歳時紀巻之二

二月之下

十四日門松須連縄を今日児童ハ戦よ大なる縄と
数人打つどひくあるそひ引るありこれと綱
引と云ふ所ふ事なり

物するよ年号附紀ふいとく立春日拖鈴之戦ハ縄
筬縄相冒綿亘数墨鳴数牽之按ふ輸ふ遊戯
為載舟之戦退刃物之進則強之名曰鈴強道
鈴ふ為戦起洗これ縄ーとお仏ふ事なり
○と表蓋蔵ふく臼杵判金いろくの物ふて

杉葉をつゝみ蓋をとゝ人のもとへ持ゆきて
きとゝの国へ行へく重をあるゝ方より取
てうれ折敷に米餅のもてなしかへせば
招来しへうりて物をとかねくしりあくと云て
乞ようけまゝひのくしあるのあり国ゝくはゝ
くゝいゝ国ゝいかいづりといふ　ゆのあ
○西国ゝくゝ日蔵書より四月廿五日ゝ
ゝらゝ折ゝくゝ芋茎と一ゝして地とおるの土と
うめんゝゝやゝ国ゝゝ事ゝゝゝげゝかゝ
ゝゝの事俗ゝゝゝゝゝ何ゝゝゝゝ

礼義ゝ言ゝくゝゝゝゝゝゝゝ
掃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ元日ゝ張ゝゝゝ杖ゝ
付ゝく蓬ゝ乃ゝゝ扱ゝく合ゝ乳ゝくゝゝゝこれ
ゝゝゝの国俗ゝゝと荆楚記ゝゝゝ
又荆楚記ゝゝく今小人四月十八日立千囊
掃道合人執杖打囊堆云ゝ茶假痛者ゝ
ゝ乳ゝ茶事耳これとゝくゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
十五日今日ゝゝ元ゝゝゝゝ
杉葉連縄等ゝ俗ゝゝゝゝ

ゝ[illegible]ゝ[illegible]くやけば火災乃変あり爆竹乃火より
回禄なるゝ事を多くしるされば西国
不又ハ完せずくハ竈乃下より焼へし風勢なる所
つゝゝ焼を又可なり爆竹とハ竹をたゝきて
[illegible]ら[illegible]むる事なり
我国ゝ今日爆竹するゝ完法なり
より初りし事ゝ[illegible]ゝ元日庭前
ゝ爆竹すゝ也ハ山膝廻屋と称ゝ[illegible]事案
内記ゝ[illegible]ゝ又陳和ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ行ふも爆竹者年一案深と他ゝ
[illegible]ハ漢乃武帝代大乙と号ゝ[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
焼のゝ行ゝ又西月[illegible]和庭燎と称ゝ[illegible]事
周元者事ゝ[illegible]ゝ天[illegible]ゝ西月中[illegible]
あつまりて焼とゝ[illegible]ゝ仏全和とゝ[illegible]
爆竹乃ゝ[illegible]乃[illegible]ゝ[illegible]
いひゝ[illegible]ハ後漢代明帝乃時初ゝ天竺ゝ
ゝ[illegible]ゝ仏法ゝ[illegible]乃道士ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
とゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
道士乃書焼ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]義もやあるやとちやすす
[illegible]乃仏を爆竹と西域仏法は義まさりて東土人
[illegible]元をまもれり西域
海布すいふるすりとめ乾ハ海門ハりさ
とまる事なるべ我道と養ちたるべし
たるれバこざ乃仏を授ることなるたるず又清湯
[illegible]れ仏ふ元日爆竹と調伏の威儀ありて
三笑杖焼奇舎ハこ義退治れとつりなるよ
時明ゑ蓋蓋内仏ふ人て伝れとこれ又義廻乃
仏ふ也ハ豈伝ずるたるんや但ものこと
陳和元日ふ爆竹とるすあるとまひく

我　国ふ人今日するるし　也乃始ハ也ハ一年
乃邪気とちるひ数せるるるるし　芸乃俗
十二月廿又日爆竹とるすし　范乃伝ふ
伝也ハあれるら厚和元日のをとるすいくを
あるるし　元爆竹乃あるハ法乗元嚴帰
と殺戮　形宗と警　むちとり祢天紙
ふいるく西方海中有人也尸羅牝人別有
類名曰[illegible]人竹若史平爆竹有寄而[illegible]
[illegible]又朱子伝類ふ或人乃いるくいるふ書ふ
ものあるるして屠とる鄉曲元多紀仏伝ふ

かれすぶ人乃うえを引ふ儀をとるの
くれなゐ世ごれば奇食喪くゐる所汚濁よく
あり爆杖を彩くうれ所依乃樹を焚色
り道よ級くやうな朱まのいく色他祖死
氣未数祓爆杖警散了又焦氏智業よ事敗
偽決集を引ていく爆作妖氣と障事作死
たり鄙人よ仲愛と云くものあり鬼乃あよ
業をなされて戸牖と用くるのさいに山鬼
志行りよ瓦石を投く妨をお沢愛巫覡と
求くこれといのりうれば却く妖業とおく

いよ〳〵ほりんちり吸これよ得くいく日本産
中よ物るく深れれば〳〵く爆作するの新十
年世よ愛ろれ色ちと祓うこて爆作ちて
吸よいて産これもり妖業乃事やうに
あんこの数祓といふく及ぶば爆作乃邪事と
降くう長程あり志あるこ
○今乃小豆粥と煮て爆作ます〳〵これと食沢
清の納そ乃枕まよ十日ばりちるれさくまい
ふこいれを世事なり寛系中の沢より初こ
ところ又七種乃粥こいてうい米粟糸之藤又草ま

胡麻小豆也と過越の式に入えしより又九條の右の
おれ紀ふ白鶴まめあつき栗柿さしかと
なりしと去る廿四日より四月に入て比叡粥防風粥柴粥
みとをとをへを人よろしきといふ事千金月
令ふこと

世風記に三月十五日小豆粥と餅くゝ天満祭と
なす意平に栗を煮てはつ粥とするもの
その粥凝付て方ふむりひ毎も粥して也
と姫を多ば疫をなすといひ伝ひ俗奇法
紀剛歌叔の兵苑ものとこの伝ひ也と

姫を多ば伝ひて伝ずしたるず也姫を多ば
て三月十五日膏粥とはくりて門戸と祭り
と去る廿四日又粥を家内紀ふを三月十五日豆
糜を作りて油膏とそのうへにくりの戸と
まつることもえそうり月令ふを豆粥と戸と祭
るといふる伝也いもなん掾とへ
○今日祖先考妣乃墓所に墓酒とそなへ新果
とすゝむへし毎月日十合ふるの〳〵ぶかぐの
ごくさとと拾ふ和書又云春祀ふ去る廿四
○枕草子いくすよりかの木祀紀ふ

（二首略）

あれこてしら女郎花ものとはんとよりたるとこ
ろとんつうひきてうそ[illegible]
たりしをふいうぐちてなるまあんうちはてさは
いうこうけうありとうらまひたるをいてて
しこと又独衣来日者よいそく年をかつりぬ
すありふいふいうきくこうむれかりく
たりしきすの弼杖ひくくつてうこうひ
まうこうあまでとういつてうをひはもく
りくなのくおうしうへ百しこく組色の下組まれ
弼の杖ひくく手京事不[illegible]杖

ふくく女房とうてバ男ものとまたてうひた
地前などふいてしくくうとあり如文ハたく
うるありしうきうり今日弼杖ふて杖杖柴か
ぞうくく無縁とうてべおとうむまなひ
とていまをもうるあり但今ハ此四乃戯
事しかりて男ものとおもしうて通
ぶよたくまてとうのあり小国ハ
杖杖杖とあるよいろどりてうあくく女と
ものあり西國まい杖ものくく女とうつものあり
小百ようう今日ハ婦人女郎ものよ出ぬ

やうのものを又兄弟の所望にて てんと
なりやまひべうの
○今年は一年十二度の園月に始まりあるよ
うなれども月は秋の中へ入事うやう
なれども春の人と春の花月と
春波の妻子人は海堂ふく春の花月と
もてはやうび春月の色 春月色
令人懷恨春月色令人和悦といひし事
趙德麟の侯鯖録に見えたり 春の歌集に上巻
門流無尽

花はいろよりひとをはなれぬ春の花の
月は月人をうきより 新古今集に
てりもせずくもりもはてぬ春の月
月夜はかきくもるのみの
○今夕は乃交とも事と已牝牡の春の令と換
すと 月令廣義に見えたり
十六日 國俗此日遊楽と事とす
ゑび雜組に奇魯人多く正月十六日とかく
寺觀にあそぶこれを春の花といふと侍りぬ
をもしまたこの日遊楽をするあるべし
○又今日を新年の乃奴婢に宿居 俗にあやまりといふ

こゝろ立人は一日の暇をえて家より父母兄弟親戚を招す

招とるゝ人数彰紀ホ執金吾ハ文中乃志の若しと雖ずの事と可なり唯西月十五日勅ちく御使一日樂とゆゝべらるこれと放夜といふ也ひの國もかゝれ事ゆゝと見えたり

廿日 今日女人乃精進の祝とて乃至上使乃精進と蓋食ふ事あり これ我七月盆乃盆と

ゝふとひとしき事なりかゝるをもちゆゝ

ちりといたりて初新祝と称ず月しさゆゝくれ

と称ふこゝろなり 俗よりひるの女乃

晦日 休浴

○凡貴女人功こゝろ嘗ハ日ゝ部屋中

とまとりを掃除するなり これハ毎月

晦日に部屋中掃除すなり 掃除ぬれば

其月中 掃除をなすたゆすして人功とゝ

ゝ ぐ ゝ 翌月 ゝ 人毎月晦日に法可

乃住ずして家中と掃除ず ひとゝ

廻表式ホ又ゝ

○前楚策に紀小元年より月晦小なれば必ず益す
晦と俗に云つゝ俗食次玄丹とうつ玄い水
小のぞんで家業すべし毎月九弦の晦日
四月を初年なりとて時俗おもんじ家
いゝ業といとのり今の世民間ふる年始の新
歳家業をとゝのへ業をかゝれ縁りやされば
世月世人切りく新歳と家業 物もろ〻秦中
歳此武蔵の風俗毎年元旦後数日お迎りしゝ俗語して
歳と号して俗生とまんこれ我 国れ記今のこゝろ
なりゝや志ゝを家初の男女をして親戚の家
まを往来して今年世人びと月世人家業
を

をして紙数多く風俗とゝのへ一志ゝ
俗と弘く晦日と同小労しゝ又世人廿月多く飲食
て酔飽志ゝく家給の吟をとゝく新歳の事とす
志ゝれハ二三月天氣和暖の比多宿花開小
多く新歳と賀すゝし是人の家賀と收樂
をとゝ俗なり古人花樹家業の活を二三月花
平開なるべし唐代参の韋夏卿の花樹
の歌て

今年花開二月春　老病知人
老不如花可惜身　掃花未免花先尽

面列卿御史高書命朝回若恒舍客若撰
玉紅春酒香
きりしたとも親戚すくなき人あハゝ
ゝを親密なるゝをゞゝを赤情の仕とべ
ゝ
ゝ月元日より晦日まゝぐ世俗の歳酒祝やゝく
鄭の幸行り唐林門善の元陰酒乃ゝと用ゝ
酒とあゝとゝゝとゝ乃ゝ有ゝ家酒ゝ方ハ一年の
乃ゝ酒乃方ゝ有ゝ皆十干乃酒ゝ有ゝ但十干ゝ
問ゝと酒酒ゝす甲酉戊庚壬これゝ有ゝゝと酒
酒ゝゝ乙丁己辛癸ゝ有ゝ甲の家酒ゝ

家甲乃方に丙酉の家酒を南ゝ酉乃方
ゝ丑戊の歳酒を中ゝ戊乃方ゝ有ゝ庚の家酒
を西ゝ庚乃方ゝ有ゝ方ゝ有ゝ壬の家酒ハ北ゝ壬乃
方ゝ有ゝゝゝ平ゝ家酒ハ皆湯酒ゝ乃有ゝ
を方に有ゝ又乙乃歳酒を西ゝ庚の方ゝ丑
丁乃家酒ハ北ゝ壬ゝ方ゝ有ゝ己ゝ家酒ハ東
ゝ甲の方ゝ有ゝ辛の家酒を南ゝ酉の方ゝ
有ゝ乙ゝ癸ゝ家酒を中ゝ戊乃方ゝ有ゝ乙丁己辛
癸を濁平ゝ有ゝ有ゝ有ゝ湯ゝ平
ゝ那今ゝて酒ゝとなすこゝゝゝゝと甲の妻

ゆゑ　お合ひ　あるよ　己の　象法は　甲に　生　辛と　丙
の　妻と　し　お合ひ　あるが　辛　の　象法は　丙と　なり
ひと　庚の　妻と　し　お合ひ　あるよ　乙の　歳法は　庚と
あり　癸と　成　妻と　す　あるよ　癸の　象法は　戊に　生
己　作られ　お知　と　なるよ　あるが　木の　妹と　なる　庚の
合と　妻　せ　火の　妹と　いく　乎れ　水と　妻　せ　土　乎　嫁
と　申の　木と　妻　せ　合　乎　妹と　丙の　火と　妻　せ　水の
妹と　成の　土が　妻　す　乎　乎　られ　お　割と　なる　ゆゑ　名
那　合　して　いく　第　なと　生　と　とり　ゆ　れば　十干
の　法　湯　那　合　し　命　一　年　の　月　形　なと　生　する　法

ある　方　なる　へ　し　彼の　名　あ　あ　法　これ　法　湯　那
合　乎　法　なる　へ　し　ゆ　ん　や　を　と　彼　し　て　ま　つ　い
古　乎　な　し　ず　乎　る　べ　ら　ば　又　時　刻　が　重　量　関　係　な
ゆ　年　法　彼　と　い　法　喝　霊　魂　を　の　む　と　あ　生　彼　天　を
の　書　法　利　塞　法　の　ま　と　い　て　す　り　を　て　る　か
ら　ご　霊　魂　法　彼　の　乃　法　な　り　世　法　こ　れ　る　乎　彼　法　と
仕　ど　へ　ら　ば　ら　へ　法　法　を　猫　と　る　る　な　る　乎　も
乎　を　て　る　の　し　ば　益　形　し　志　あ　ん　へ　い　法　法　し
ま　る　が　ず　し　て　可　也

又　山　月　及　三　月　九　月　中　生　法　が　す　日　月　月　法　て

日月の祭りとなるあり梅とるる月孔大宗伯
の寅家祀日月星辰義云祭日於壇祭月於
坎楊氏云春分朝日始出夕月出之祭日月之
法賈逵傅仲云二代之礼天子春朝夕日神
暮夕月鄭氏云祭日南壇顔氏云朝
日の朝夕月の暮法迎喜初出也月出也一牧杜氏
通典又新唐書考工記
これらの天子の日月の祭りの事とこれ
朝夕人皇五十二代淳仁天皇の御時天平宝字の
比若ふしらく郭氏の紀春日大明神より二ヶ所
代の孫智信とふ社務より勅命あらくは孫乃

事ふ如之ぐ無みく魚味をとるの別史とはく見
とかまし山法師ら日待月待乃事ゆこなる
つ今乃世俗士庶人よりてるまで俗と稱し給
とのまま世祝儀とまう命饗食とるへて日月
乃祭をたゝ一日待月待と号法天子にあるす
て日月と祭るるすてを小儲乃祝れをれわ
志紀る何事うこれは志ゝんやむゝ魯のた
史事民ら天子乃祭楽と儲し八佾して庭ふ
舞せしとゞる孔子そゝ正ひて色ともあ
屋くいづ出とう志のふゞゝぎふとのるまつり

そんや月と微妙乃事なるやとや此祇の条
と明日月をあるごとかろ〳〵しめ祝とおんと
あや祇を此祇とうけ給ひぶちんで福とるる
あ〳〵やヨ別よ天ないを地とまつり法候い社稷
と乃ろ大まいめ祇と乃ろ〳〵少り出ろ〳〵一年
士を二祀と三度人い一祀と三これ乃祀乃かか
てこ祀と乃ろ事あい一祀を乃ろ〳〵ようと文番祀
ふ乃ろ〳〵り上いとかねろう事とひ下いと
と僧すう事とひど乃ろ三ひ天ろよひすし
天地日月とい乃ろ〳〵ひ史ろ地日月いろ祇

あろうろ〳〵あれろうべ〳〵ひあろ〳〵ひ事ろ
久〳〵といろ〳〵なんそひやまりろく祝ろよ嫁ろ
度乃又祇道乃の祝ろい日祇とい天地乃祇と
あひろあり月祇とい月祝ろとあひろよりろ
ろ此乃祇と日の祇月祝ろい月乃祇ろ三ひ乃く
ひろあり三ろ邦乃法ようろ三ひ日祇
あ女ん乃ろ〳〵ひあろう史沐浴奇祇〳〵事乃ろ
おろく潔祇とろ出ろ日とあ〳〵夕ろ月とあ
ろ三ひ〳〵日祇あひろろい祇ほと更ひ月とあ
ひろい十乃祇と用乃〳〵乃のこくひ〳〵ろ

おぼつかなき事なり。しかるに、善知識なり。弥陀の
願とうたがはず。決定往生の人なり。天子にあらず
ともの人、日月をあがめる事いかなる人なるぞ。
元始天尊とは、なんぢ、人を強くして、かつ、
弱あり。いそんや、天地日月と、御恩の恩をもつて
とや。我日月をば、一向、尊ぶ人をば、ふかく、弱
者をあはれみ給ふ。天地日月、弥陀如来の御
天道、弥陀明王の御ちかひなり。なぜ、人と、
一体なれば、なぜ、ものごとに、借物
の恩をば、なぜ、不善よりもいとをしきと

の道理なり。しかるに、むじゃ者なり。
又、後鳥羽院御世紀に、弥陀をうけ、信ずる道
を、法然上人、ならびに、親鸞聖人、仏法の息と、
て、弥陀と、垂迹、されば、神仏、
仏法と、二法、あるべし。より、伊勢太
神宮、内外二宮、を、信尼のごとく、社家、
とゆるされず。ものぐ、姫、式、伊勢、斎宮
の三宝、仏、と、申、種、と、紙、と、ひ、語、と
あるべし。寺、と、尼、ぶ、といひ、信、と、髪、と
び尼、と、髪、と、云、尊、と、片、脇、と、これ、と、同

乃七ヶ所といふ又かの七ヶ所のこれ神明社ふるく
いまこゝにましますなるべしかるに所名をぶいかるすと云
さぐるまゝに祖をたゞしてこゝなる事かれさとし
ちかるまゝに今日結月結月にては神月神とまつり
なをの小俗を清一紙にしるすなり一八神明と
けゞまりあれどもいまこれをふするまゝにこゝに
さてはいまこゝにはなどえ作る人作る人
を習ふく参せざるやのおやまりよりこの人
数一天地神明いまもたゞして俗よりのせあ
をうきずしかるに地祇乃口ざつるゝ

だ月結ざいひとなる事沼祇乃祖なり世人
天祖をあまくまれ紀まりかるに地祇氏をとな
をへうしたこれいさゝ妖亟贋俗乃ゝまぐこれなり
ろひて高よ偏と高ろあゝす所天地神明の
なりとさとなうまいこゝ乃も世俗乃あや
まりにおもくなる世ちかるとおもとのこゝ
又世俗よ庚申待とてもゝろあれども山月の
のこゝ事ゝあるべとゝ見待月待よ鄭世ゝ
ろあれいこれとてこゝ作ゝ国湯雑組よりそく
凡庚申乃日三尸人のゝるとふもゝび庚申と

守ぶいこと戸なるべし庚申とちれば己
戸仰すゑ大年庚紀よりく敷を三屍れ紙
常よ人乃中ゆわくを死とうりひ家
庚申の日ゆ知ごに上帝よ祈なり
仙とまうのすべ三屍と縊べしかれでく
なぶばされちゆ祈仙べし左上威強編て
いくこ乃祈と云くく人乃身の中ゆり
人乃善過とすく考重く庚申乃日ごに上
三紀罪のかまれ天曹乃ゑに上りて世
人をく乃ごと祈の過事と知祈ひるとゆ

かはぐろれ人乃あやまちたなれば天より一紙
十二年乃寿命とうづひ少すなど一年六年ゆ
乃食とうづあるよもまと祈べこのゆくして
てこれをさけとあり加紀姫妻れ紙か
んぶ作ずるよたくんや積善れ家へ紙を人
ゆり積不善乃家ゆへ殃あるを人乃数
ゆく吸紙の祈ゆ志ゆるゆ善となりて
庚申の夜紙ゆてをりぬ迷いるを死と
まぬゆ人よ過とせとをもゆ
祈べ不善となりて死と天ゆひ迷べゆ

ふるのきつねりとたてぐろやいそんや庚
申とゝもとハ考ふる乃義よあるべきなれ孫の
らびて鶏明よりてゝ今世の俗これと
ちゝど懸金とまうす庚申と考ると稱と
あやまり乃上ハ是の屋ちなるべし又吾邦
ハ庚申ハ猴面羅大神乃名にて祈日あるく
其大神とまつるゆゑ人を作るこれ又
陰金の依なり又庚を金なり申を金なり
金と金と朝すれ日あるゝしむべき日なり
此ゆゑ中ハ土とへて赤生れ多とゝ

元又警法なりゝ乙約のお剃とゝ庚申
ゆゝゝやいうゆゝ人ハ猴ハ申ハ
見て猴ゝたゞ流俗ハ考ゝ此猴姿乃
ゝとなすハ考ゝ所なりれば柳子厚三戸
と罵又あり長測類三歩伝の一経系論柳
ゝ又に跋ゝゝ又俗史略ハ庚申乃今を
屋去れ邪法ゝて秋氏ハ作べゝ法と考ゝ
法屋ゝゝれ姿ハ申を知ゝ
稱僧揉作ハ夢ゝ又ゝ測類ゝ作ハ
ゝを又ハ祖ゝゝゝゝハ法ハ美に堪ゝ

神罰の行ふ所之を初世号二庚申一と云ふ
と雖も猶籍り用ひ代代傳へ唯表推甲子を
号二庚申一と云るよし

世俗云ふ九月とて此三月と掏る事なるべ
中毒みやすくなると又てうり込雑組よ
り九月上旬上旬唐もり来り此あり清酒雑色
小いとく佛法此三月石寶素月不宣事義
足被借乃人今京師官命下列位初月此三月
百差歌又如外皮世不稱既多何
石四之基せしなり又郷郷代解編よりく四又

九月石上皮戴地つくく釈氏乃勇猛よ天竺
釈尊説とくく以大神別とて毎月一度び
掏て人乃善悪を察す此三月南瞻部別と
てくく唐人これと云く石刑と称ず四三世
月芳法国く唐家といむ石上家後世国
云とのんこと云と云くて並び深唐氏乃犯より
傷ものに成ることなれと色地と論ずるよ及び世人
ものすべ拘らよものびまびて可なり
もくくみも四月よ猩猩乃像と図して鬼と称
七月人ら唐義に乃人ら我 国まも猩猩の子

世ハ久しく文武修えて天下治まる時と成て
を棚する事なり世を遂び唐遊史よりこれ武
年中に強旭といふものの科革の為世ハ乃
せぶり事と恥く渋よ絵て天下すこれこれと
なれを袍帛を絵りて華〻世を世ぬ明皇
武年乃四月元日の花氏蓋よりひとり乃小鬼ゴ
ゴ屋敷と称して如笛とぬとむ時よ一大鬼来
て小鬼とうとうてこれと呼よ明皇蓋乃うちに
こを立ぐらぐと四方へ飛くやうに見て絵笛乃
を強旭ちり口を刺せ〻時袍帛乃華と

絵りて紙蓋乃世界と新せんぐみよ撃て天下蓋
耗乃鬼と深くとり入ひて長さ夫世とれこち
長遊生よ命じてこれ徳と図〻てこれと名ゴ
はこ〻ら生てこれ鬼の杖りなるこ乃
ちの生ぐと強逃陽強旭表あ生ハ用元
より赤流よ乃車ハ乃こ〻ハ掃きこ乃小強旭
拘生よいこく強旭唐乃明皇氏蓋こり起りといひ
はこ乃こ乃世界乃史よ老臣帝乃名ハ強蓋字
を降邪干弼家ハ強蓋乃家氏家藤乃妹の名こ又
強蓋ハ乃ぐ蓋と姫と撃国て家ハ蓋乃乃こ

東方朔経国よりはじめ給ひしとく蘭麝よりはじまれ
也とかの又考工記乃法よりはじまる蘭麝ハ椎乃名なり
中ほどうり蘭椎の形ハ似たり椎又蘭の形よ
似たれいなと国ふ俗乃一椎と称ス異と
うつ国と書て麝ハ猛獣とゝ云ふ事と始むるの
国ハ猛獣の俗と他ハこれ未詳乃意也ふ
異と嗅ふとふ蘭よ麝よりてうれ猛と
しる

猛獣ハ時珍乃猛とはくまなり猛とすべし
唐逸史乃猛のごときハ誤なり俗で老猛

とゝ云ふ婦人乃書と作ゝ書ハ書ハ紀ふ上
じとゝ云ふ也ゝ
又東朝ふくい元と大師として美恵僧正の像と書
てつ戸よりつを邪癖とふ世ゝまゝ乃ひなり
ふ世ゝ俗人乃家ごとにもとるなり言葉
ふ世ゝ恵僧正の彩像と取ゝ乃民家よ押ハ如の
僧侶ハ時猛と云ふ言葉とうして楚くいく意
彩像と動ん而ふ乃ゝど邪魅実彩とうら
んと又猛よ疫と猛ふとうとうとうと乃ゝ
却ふ乃ゝうやう乃ゝとふ世ゝ乃ゝ世ゝ也ゝ

ゆえに枝しゐ逆とまるべきなり明らかなるべしとの
けうこうれきこの書にあり
八月樹木と接穂べし四月と本とゆり上げ
也左書に乃えて桜と切りく地に挿し此月
より又花まと接穂るべし八月より下し
廣義より見てうこれる接ぎ乃氣とゆえく絶
生活とうあるや岩改全書よりとく元徳草木
と植るべし下弦の後より上弦の前より
八日と陽氣八月より活るく蟄ゆり動とて知へ
氣盛なる樹木乃生氣全く枝葉より有るよ

接ぎ枝を挿とやうの接木をれべそ本とやつる
又いとく元果木とうゆるる先九月乃中より後
樹はまつりと姫くく縄とはくまつりとかくをり
しるあるとは肥土と八水と流へし次年四二月
うつしうるべし接穂乃樹土と半分へく接ぎ
土とつきかくきこしへし上よりやうなる土と加え
地面より二三寸たかくまるる土とたるべし
く重へうる接穂くのち半月ハ毎日水に流へ
此月柳乃枝と切て流より挿ハ速に繁長とて月八廣
義なるべうる元此月枝を挿てすべる本ハ接

樗松　圓柏　五葉松　海紅　海棠　山茶花　不老
山茶　薔薇　黄梅　櫻　桃　梅　柳　竹　蓮　菖蒲
よかし　細柳　砂土　等がにして　ゆるひて
よくまぶくらもすだるる　地よきつきかるて
枝とる事のごとくなるべきなり
えぐみなく　先完　とさして　けくその完　そぎ
たる枝　とまるすさしたる　ケ所　をそぐ
陰枝　よろし　或ハ　よりおりひとそぐ　日とゐむ
あるいハ　ぬくれ　ごとくとれば　潤せざるすなす
れよりて　根生　たる時　移し　うめ　又移

色　よ　蔵　新　せ　ぐ　木　ハ　又　月　梅　取　乃　時　植　て　ば
物　を　蔵　る　木　を　四　月　よ　植　へ　し　元　さ　し　木　実
う　人　ま　ぐ　ハ　た　ま　く　生　ま　し　取　実　利　用　よ　豊　の　て
蔵　る　よ　十　年　乃　利　を　樹　と　植　く　あ　ま　べ　と　ス　そ　る　よ
と　り　る　ハ　元　苗　木　と　植　く　匠　そ　と　な　し　日　く　園
中　よ　蔵　ん　で　る　れ　生　利　と　新　し　る　ま　と　を　を
貴　と　ふ　ま　て　こ　て　る　ん　し　の　蔵　ま　り　植　る　乃　男　絶　之
生　を　弟　可　新　と　い　ひ　新　新　し　月　ま　ま　し　時　住
無　る　人　同　く　い　る　ハ　方　絶　蔵　月　ま　ま　あ　う　と　新
て　る　ま　生　絶　の　に　と　う　ぐ　ま　べ　し

吹陽ひの程花待よ
淺源紅白宝和間。先ず後仍順次第載。我欲[illegible]
搗酒去。[illegible]一日不花開
楊梅[illegible]ろ[illegible]緑乃待よ
三匁初開見蔣卿再開三匁有開明。[illegible]向奄有
[illegible]。一匁花開一匁洗
趙白[illegible]ら[illegible]仁奉結
白髮稀根[illegible]遠[illegible]仍年及見[illegible]。老年但欲
深培植不向風花結[illegible]
四月[illegible]初[illegible]本[illegible]

[illegible]ことりが[illegible]
むまれろ牡ひなどん[illegible]
山車月令[illegible]
貪欲山[illegible]
付但老也[illegible]
[illegible]付[illegible]
天地[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
四月[illegible]

芭蕉なとハ面に遊風を起す又梨をくふ
ことあり又鸎鷖不時に地を蕩して飛騰
の気を避べし　月令広義 書叢書等に見えたり

凡一年に七十二候あり五日を一候とし三候を一
気とし六候を一月とし七十二候を一年とす
正月より十二月まで毎月各六候とする也先
正月の六候ハ第一東風解凍 第二蟄虫始振 第
三魚上氷 右立春の三候なり 第四獺祭魚 第
五鴻鴈北 第六草木萌動 右雨水の三候なり

凡一日一夜漏刻の数百刻にして百刻ハ漏水の
間に立たる箭の上にきざみたる数なり陰陽の消
長によつて昼夜の長短ひとしからず
昼がなき時ハ夜みじかく夜ながき時ハ昼を
しるし夜二十四気昼夜たがひに長短ありて
是より以下毎気昼夜の長短をしるすべし
先立春ハ昼四十三刻五十分夜五十六刻
十分合百刻なり雨水ハ昼四十五刻五十分
夜五十四刻十分あり凡六十分を一刻とす
月令広義にみえたり

日本歳時記巻之二終

日本紀略抄記卷之三

二月　花と蕊を挿と云中と春分と云○二月の異名　仲春　如月　今月
紐を交結と云○二月のわかなと衣更着と云　正月　俗言
きさらぎ　ふたつ　ふたとせ　ふたとせ　ふたね　ふたとせ　ふたね　ふたとせ
いふと略也　りう　興　似物　ふたえ

朔日　中和節と云

二日　今日を節朝と云　湯沐　ふたえ

○孟子乃ち日あり　白虎通　周礼　定王
なをふまれたり　三年七年四月二日孟ふまれ
今の二月二日なり

○國俗奴婢を求ふ　今日より来年二月二日まで
いまく朝　三月　九月　十年
とふて　仕奴婢　財　かりて　年紀人

たく居る元奴婢と称するよ孫乃おすさとあこ
す又才覚ひろものとあれぐらよぬしべりし繁家
にて才ある志いきい多くて多くまれなるべたく修家
るものと称べし（臘仁りいとく買奴僕必粗養有銭有労百姓家者）毎才ひりて供
令んよかれひるもよい多くい奸曲ものもと
乃古き法よ上等のるよ乃りて多れ人とつりて
いるもいきるり又帝王已ハ貴奴を使べり法
下賤乃ものの年久しくをけるべるすなるとれ
てんはこりれどりてあやまち多きものあり
約束と一年と定めもしその人不ぬを責年を使し

八日　釈迦仏乃生日なり仏祖統紀よ周昭王二十四
年四月八日釈迦仏生とあり但周ものの月なて
四月とれば四月ハ今乃二月よ当り深屠氏かく
事と考ざして夏四の月ともいハのやま
つまりと古人乃説ふ見えたり
十五日　提要録ハ今日ものと也称べいふまと乃家中ものく
百家競ひ開くはかなれバこ也紙銭を焚
こ乃なり八月中ものと秋の家中なる也月夕
と号して月を賞すうこと也
○仏説ハ今日釈迦入滅のはて涅槃会と法

ちうれいこれを月建と考へやまれり掛どるふ
海は周れ穆王五十二年二月十五日佛涅槃すと記
せり月の二月は今れ十二月なり志ゑ是ば今十二月
十五日とかく佛涅槃ゑすゑ

十八日　孔子乃卒し給ふ日なり　孔子の生卒乃日張説なり
これハ孔子ゑ古今代乃説
孔子先生の祝なり

二十八九日　ひぢ艾蒸と田野ゑ採しめ求い市て
ふへし上巳乃茅餅ともゑ有り来地ゆる人ゑ
農まゑ拾ふへし

清明沐浴

春分ハ日夜のちさひ〳〵さ河なり寒と暖と亦忘と
ちうれで夜ハ春ゑ日出るまで二分半と晴ゑ
日入ゑ暮まで二分半と昏とす昏暁合て半河ハ
夜ゑ属ふゑ也ともろれ明ゑうるゑ昼に如ハ
ゑれば日夜ひとゑ河と也て夜より日ハ長し
冬至ゑ一湯来復して粥湯事生ゑ日ゑなゑ
なりゑ春分ゑよりゑ日夜ひとゑなる
春分乃日考妣先祖と祭ゑ元人ゑ中ゑ
考妣先祖ゑ神ゑとまつるゑ考妣といふ死せる父母
とゑ先祖ハ祖父祖母より以上といふ先ゑの祭ゑ

ひとしく考妣とまつる法云ハ首祖より始て
多り種子ハ高祖より以下を多るとしとい一の条ハ
孫とはしてすハを思とおもゆる乃義なり又母先祖
を我身の根本なり三月ハ三月嫁よ多祀して
供をいとくこれとをつゝを遠ゝと遠けんを思ひ一年
よ又日なり四月と五月なり四月乃条ハ仲月紙
月ハ〳〵まゝ分夏也姉ゝ多也なり妻秋二月
まつるを可なり五日ハ祀日なり一年よ五一日也
和俗これを猪月とよ毎月の月ゝを古猪よ何ゝず
日年ゝく中比ようなこれり猪年も厚ゝ法ゝく

素食とるハ可なり春秋乃条と五日ハ条よハ何ゝう
じゝ高戒〳〵年也食と後ゝ〳〵ゝ多猪を
と俗ゝ〳〵日和よ五ゝ五ゝ乃簠簋籩
豆ハ数ゝ器と用ゆ〳〵ゝ呂考妣祖先の目前
なる物と用ゆ魚〳〵ゝ又ゝ五ゝ〳〵ハ亦条よ肉
食と用ゆれど日年ゝく今ゝ魚多等ハ肉食と
ゝゝむ〳〵ゝ俗国俗よ多ゝ〳〵ひ何宜小ゝ之〳〵
古猪よ志ゝ人ゝ多又亦猪と考用ひ何宜
土俗ゝと斟酌〳〵ひ〳〵ゝ
ゝむゝ多魚〳〵

いにしへ　中納言を釋奠ありし朝延より年ごとに二
度大学寮へ孔子を祭らるゝ二月と八月の
上の丁日なれども此國は彼年のまぎれなと
あれば中の丁よりあり但大学寮は孔子および
十哲と祭らるゝ法國は先聖文宣王先師孔子と
祭る左宰府は先聖先師周公饗をまつりしより
延喜式に式部丞一人を以て大学頭元年二
月より始められしとぞ　後花園寛
正年中まで釋奠の儀ありしが應仁の大
乱の後此禮絶しとぞいとかなしき事なり

春分秋分の初日より三百六十日と作りて其後
七日を佛氏名づけて彼岸と云又彼岸の中日
を中日と名付て又時節七日の間世
俗寺に詣り佛を供し僧を饗す又僧法師等講
經法會とて彼岸会と云埃嚢抄に豆
腐等にて始て沈丁を焚く沈岸と云
又日出日没の支岸彼岸と云ひしより彼岸と

俗乱雲人は上一人より下庶民に至るまで天下
万世此時を尚ぶ　如初月を祭り給ひし事也
秋奠の礼式延喜式
に詳なれども今略す

如くなり此説のごとくなるべしとて蓋れひとつ事
事と思ひ取るべきあれども此時よりかぞへて漢經法經
とあり又仏説に佛ご滅後千年ばかりの頃
林屋山聖龍と云ふ僧成佛の乃説に鶏樹菩薩の記と
引て如来涅槃の例に羅睺羅尊者ありて二月
かいれひとを七日七夜ようして後秋八月七日果来摩
竭提国王梵天帝釋等菩薩集りて七日乃至世間の善人五
人乃至十人を生死彼岸涅槃彼岸亦曰宣取二七日と
修善業いとゆる事婚七日ありこれ事なりあるべ
しや低平石乃縁と彼岸七日年乃風俗なり意

ことなりしとなり此説もこれたく我 國此
源房氏乃多世乃事なれども中興天皇よりの記事
なるべしぬ古これとなきを彼岸乃事と書たり天武
強化と云ふ書一巻行りこれ天武誅樹菩薩乃作と
伝説ありしと伝られしと伝書あり我 國此伝の説り
てなくいひなりしなり又日興源頼朝ひて
くんぬ事とうくちく書たりこれ君誕生事
のことなりをなり多く佛書と引伝れて別なく
書しかるものなりと思ひ世説これ書と伝ずへ
ふ伝こしまた社日なく春秋に二度立れ社と云ふ

土をよく万粒と書ひ又穀と書ひ故よりの事の農
事はよろしんるをといのり祈いろれ悪雨と雖ずるを
もんその日八立春の日八立春の後未の戌の日と書社と
ちなみに後未の戌の日と稲荷社へ（十干の中戊己八土なり
あるよりこれを以戊の日と月の稲荷と伝ふ元日八去日のことなり）
風信通よりそく芸三氏と倍くよりを遂と書社と
舟車乃多ちろ乃足跡れ遠乃ちとこ後寄演ま
いるまーかーあよ犯て祐祀しすた伝よいく芸三
氏ろ所り句読氏といよ平水土あ小犯ていく社氏
弥記郊特牲小厲氏乃天下と居乃時ろれるを

農といよく百穀とまの夏乃衰ろ乃ろ関乃
葉繰ろ有よ犯くいて穂ろす芸三氏の九州て
霸ろ時そのをと居土とよく九州と平ぐ有よ
犯ていく社ろすしいて（蓼邑のちく葉百穀と樹樹の
穂ろ百穀乃氏ろ有よ穂と穂といく）
ろれ社を土祇なり穂ハ穀祇なり土穀
乃祇と書ろるを氏と生ろする有ろ
らにく社日ろ村民たぐひよ来往て酒食を
酸飽と祭とんえて弥演ろ社ろ乃詩ろも家く技
酔酔人帰と伝ま乃又ひ日乃酒ろく聲と居ひ
有よ居聲演と人づく海緑祭事ろ人ろ

蓮 三月社に付いてうり 秋社の時うえて尽 長養の内
三月に陽気の厚くやく發して芽出ること
なり 春はまづ乃芽入し後たちまち 法華経花
乃如しこのたねとうゆるまるとすぐとろろと
通しくさひなりて彼岸より初て花をまくとい
百民ハ四月ちよたくと 土用まで古人のうゑかくら
とまづ 清明日 花ひらく 三月初て一年の
大節なる事とまづ 又花芽乃薑とろ
ち 採へし 初のうるしは 花根とまづ
厚ふるものハ 甜瓜 菜瓜 茄 蓋蘆 冬瓜 絲瓜 胡瓜 苦瓜 蒜

授 蜂草 地膚 芋 莖 蓑荷 蓼 椒 木綿 蓮 蒐 百合 葵
紫蘇 萵苣 甘藍 牽牛子 雞冠花 唐朱紅 萱草根 葵
芍 又元藥草 花芽乃根とまづ 三三
月 但 牡丹 芍藥 おなじゆるよう 後 又 芍
月 樹 木とうう 植へし 松柏 なとは 八月 八樹とう
乃中 時 古者 乃 又 乃 又 樹木と 接へし 梨と 接
ふ 三月 乃 十日 と 用ひ 柿と 接 三月 乃 後 十日
と 用へし 三月 今 唐 義 三月 又 三月 の 白
海 三月 乃 木 桃 と 接 ハ 生 又 二月 上旬 二 法 黒
木 乃 桃 と 苧 う 蒜 蒜 こ て 地 と 切 ら ば 生 ら と

うゆるふまことれりつ又そく山月法果あに塔へ
山月法華経根と稱ス牧むへし沈香中の名物て
そく古法華経と稱ス多く二月八日と用ひこれ
法よりまこと部ひ組二月い茅己に茅し八月ま い苗ひまご
根と名ようろよと紀ま人知りひときれて菊ひ立ていまご
良附ひ世ひ大率根と用ひ初て宿根ひ い茅多ま
附ろ人ひ津澤ろれろの根ひ呼てひ生べたりこれと
織人とすひ茅蓋花茅ひとれろ見ひ前かに附ればこれ
実して沈ひり黄行ひ附し生ん屋ひ多ひ深ひりその宿
根ひ附ひとれろ苗ひ茅ひ い茅ひ紀行ひ附ひ

へしとれひら根ひ延ひ多ひ己ひ足てまこひ茅へす
今ま茅ひ延ひまひ花ひりざひ附ろれいすかたら根ひ解に
深ひ多ひ附い根ひ遠ひ延ひ多ひこれそ新たり
茅と用ひ拍い茅初ひ長ひ足ひ附ひ芽ひ用ひ拍い茅
茅乃ひ附ひ深ひ茅と用ひ拍ひ初ひ延ひ附ひ取
茅と用ひものい茅と紀すひ紀取ひれ深ひ附月
といすへひ茅ひ土氣ひ晩ひ天附慈休ひ五花
三月ひ花延ひ茅ひの深ひ乃中ひ茅ひ月ひ
ひひひひ楽ひ乃ひ二大華経ひいひ人百日
茅花茅ひ茅桃花姫蜜柳。これ茅ひ

此月日を撰び灸治をなす人多し二月より
八月十一月より灸して湯薬をたすけ和剤をもちゆ
〇七月三里絞骨より七壯灸して毒気を洩す
灸より強乃方書より尼孤人弟たゞ年月日時不
洩て樗灸の日あり元素問雞鳴より古芳明醫
乃ゆゑなるべし後世衛者の説なれば信とするに足
ずたゞ四季の節気に云へたの絞より灸は稍
あり然れども絞よりあり灸は腑にあり之を素
問乃ゆゑなれども洩さるべし鍼灸聚英より記す

又月毎月に稍々二百餘穴をれへ鍼灸と
申候初めて者を要用する時は夫婦の事を
月令廣義より見て
天寧和尚の説邪外の邪より起歌して血気と解
暢とへ
朱子乃説より周礼より仲春令会男女とあり又
周禮媒氏の注より陰陽交合嫁娶順天時也とあり
此月男女嫁娶乃礼を行ふ宜しき月なり
此月遇と食へ大に益あり千金方に乃ゆゑより兎と食
へ絞と傷る雞とやゞ茨菰葉及漆葉と

くハ癇疾と成と聚まると食るなれ大蒜と食
へ人をして氣あらさるむ小蒜とくハ人乃
志性とやはり最生冷と食うとこと又陰虫の流泉
を作ることなり生瘧瘴と成ハ月令廣義書云
蓋書云ふるなり

二月八日候第一桃始華第二倉庚鳴第三鷹化為
鳩 右蓋鶯乃三候なり第四玄鳥至 右燕乃三候
穀雨 第五雷乃発聲 右蓋雷乃三候なり

晝ハ晝四十七刻五十分夜五十三刻十分春分
昼夜十刻 夜五十刻 月令廣義

三月節と清明と云中と穀雨と云○三月の異名 季春病月
蠶月 桃月と姑洗と云○三月乃初と清明と云異名
にはとく風あたゝかくなりて草木いとくなり
少くよりやおひ月といふと聚ろうこと

二月 沐浴 艾艭と煮すへし

三日 今日を重三と云又上巳ともいふ初と云ふこと也
いにしへは三月初乃巳の日を上巳と云ふ三月を
辰月と云ハ巳と深日とす不祥を清くさるなり
流水の宋書に羅より後三月と用ふ巳乃日を
拘りなくいとりはく今日艾艭と食へ桃花酒と
乃ミ艾艭と親戚よりとる
今日艾艭とくるものと考るに前楚宋時紀

三月三日鼠麹乃汁とゑらく窓こ合豆粉こ和こ
ゑらて諸石粉 音拔米 併あり とゝこれと食とをバ厚酒
氣こもるゝ也 又 あらのゝ鼠麹酒中山 陳家庭園
時ゆ去契歌 雜米粉 合甜美あり とゝこれとゑて
足立いもゝこゝ こゝ鼠麹と用ゆゝこゝゑてゝ又
文酒家 孫牙一 ゝ田舎ゝ多ゝ作り 俗ゝ母ゝ多を
ゑらく二月ゝ始ゝ 蓬 蒿 ゝ 採 ゝ 汁 ゝ 有
ゝ ゝ婦女 ゝ れ と ゑ ゝ く 草 一 搗 ゝ 汁 ゝ 俗 ゝ す 俗
ゑゝく 菜 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
鼠麹俗ゝ用ゆゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

用ひゝゝて丈ゝ用ひ来ゝ ゝゝ又 紙繍 ゝ ゝ
ゝゝゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

とのゝ事月令廣義に法天生とゝ引て云く二月桃花とゝ
れとゝ流よひ〳〵これとのめい病を除き邪気を
たゝらかしとゝ桃花を酒に浸さいひ〳〵の如と
用へし中参乃花と脳され鼻血いてゝやまぬと
中参よりの人えより

○ゝ考ゝ二月節に考妣乃祭日に昔の時食
ゝゝむる物あり世間乃人もかゝ事ゝ
ゝり俗節云元日乃上巳端午星夕中元重陽等
乃類なりこれ世俗の常とする所にてゝのくゝ
時食ゝゝく賞翫し宴楽ゝゝ考妣先祖とする

さゝいんよりゝ又豈死に事ゝ事ゝ
ゝゝく亡に事ゝゝゝゝゝゝゝゝ
や節ゝいゝ用ゝ果蔬等の類也時食ゝゝ上巳の
草餅端午乃粽中元乃蓮葉飯重陽の菊酒等
飯の類なり元と醴に酒に菊花を
初に雑煮とゝゝゝゝゝ

○ゝゝ〳〵今日曲水乃宴とゝゝ
し被禊ゝゝ流水に觴とうゝ
ゝゝ俗に清と飯ゝゝゝ
ゝゝ事ゝゝ觴と

續齊諧記ニハ晉ノ武帝尚書摯虞ニ問ク
ニ三日ノ曲水ヲ義何トカ拂ヤ摯虞對テ云ク
漢ノ章帝乃時平原ノ徐肇三月初ト云ク三人
乃女ヲ生シ三日ニ死シテ三人ノ子ハ一村
ノ人ハ怪ミテ棄テ之ヲ溪ニ捨テ盥洗
シ遂ニ溪水ニ浴ストウクベシ是ノ故ニ三月
三日ノ起ル事帝ノ云ク此ノ事ハ依ノ事ナルベキ
ハ如何ト尚書郎東晳ニ問ヒ給ヒ摯虞
ハ小生ノ人ニ是レヲ問ヒ給ヒ周公ト云ク溪
邑ニ流シ溪ニ居ク庇ヲウブ故ニ逸ト云ク

羽觴浮波又秦ノ昭王三月上巳ニ曲江ノ池ニ金人ヲ
テ水面ヨリ出ル水ノ劒ヲ持ツ故ニ今ノ制有ル
及秦乃覇ノ侯国此ノ立ル曲水ハ漢ノ後漢ニ
お沼ク云ル事ニ帝乃ハ善金ノ作ト
東晳ニ問ヒ給ヒ摯虞ト尤遷ク陽城乃今ニ
云ル云ル云ル東晳ノ言ヲ又一説ノ附会ノ
作ル云ル又風土記ノ後漢ノ郭虞ノ言
トアゲ作リシ云ル後漢書禊條ニ三月上巳民
益禊於水上ト云ル是ハ漢ノ時ニ
ハ郭虞ト始テ云ル鄭乃國ノ俗

三月三日乃日蘭とあらに宗く石祥と狩除と陶さ
ゆ経は郭風よ尺文音を水清り流するる演作よ
作れてうは姑久しまよ事なりへ
句蘭義臣陽氣敷照握芳苑臨清川乗和蠲潔用徴介祉其義深
矣源文梓異今三月宴序云八酒食出于所曰禊飲古俗也
戒　朝ゆてゆ水乃宴とはいて事　那宗春は
御宴より始れりこと世を乗　國ゆも曲ゆ
乃家の行宴てるゆ人を中作たるゆ
狩楽会編は日本三百有二桃花水宴と事り
新後京は定家は歌ゆ宴乃奇り
光くりたるまゆやあ乃ひ乃きゆ名をなれ

毎ゆ新はさうつ事　又こゆ安宗分こと事に
世ひひのあゆ紙は事ゆ作ゆされなるに
きるゆ事ゆを新はきゆ
○又今日新合きるゆあり世張同宗こくきゆこ
乃事ゆは明宗ゆ佛門たゆ事ゆ雑ゆ閑志ゆ話に
しにおどたく作ゆつまゆ作ゆ少見ゆ百人と事に
法雑坊と云事ときゆ雑とゆ名ゆ作ゆこゆやゆ
明宗八元角の年ゆ生ゆ話ゆ赤閑話とゆ作ゆ
しゆ東陳新ゆ作ゆ事ゆ作ゆ又作ゆ
今拙きゆこれ唐乃宗乃事ゆ作ゆ東城又老作

といふ書にあり玉燭宝典に寒食乃節闘鶏
を闘しめて戯とせり又清明の日に鶏
とたゝかしむるはむかしよりの事にて日本にも
むかし唐の玄宗の本事も清明の日此事ありけり
かゝる事にて我国にも此日雞合せとあるにやおよそ
闘鶏の事また郷にも見えたれいにしへ下らざるべし
○此日艾をもて縄となし戸上にかけ風にあてし家の門にて
よしと平金月令にみえたり又端午にも用をかへり
○今日めしわらへの女児は雛事にひゝなかたそいそ
ちいさき人形をもてあそぶねなかたりぬかなあそびの
事も源氏物語なども見て知れりいにしへ今のつねく
しつるなり又源氏よ十まなりぬる人はひゝなあそび
ひはいみじき人のことおほく十にならでもと家
事なれし又遠きはくこととも見人形の衣服とぬふ
てこそ世帯をもくせなくこれとりてあそぶよけり
源氏はおてかるあまるつひなかるべし

晦日　清明　今日とこ三月尽といふ其八湯節乃時
にして天気融和にして草木発生し鳥鳴蝶飛人の
血気も和暢するときなれバ花貴遊して見しくる

へり次ことさら[illegible]津くるゐかずとて郷にいて
かはらひ正岳に先縁して部(?)を実(?)し春をさ
互し後撰集に元河内躬恒か哥
われてなくさめつる(?)花の日まくらに[illegible]
なからてみらん 玉葉集に三月尽の心を大納言
[illegible]をすつるわかれのかなしくて[illegible]乃[illegible]とてや
ちるらん 又おなじ大納言為兼の哥に
[illegible]ものはいつとなけれども[illegible]のこふ
ゆふくれ[illegible]

賈島か三月晦日贈劉評事詩に

三月正当三十日。風光別我苦吟身。共君今夜不
須睡。未到暁鐘猶是春

清明三月の節より二日前乃日を寒食と云此日もろこしにハ父母
先祖の墓所を掃除して祭をとなふるものなりとかや
これハまた日本乃風俗ならず張子理窟にいはく
食と十月朔日展墓へからず墓木初生初死ハ
古礼に志ある人ハ此日祖先乃墓所にゆきて拝掃す
へき事なるべし
此月親戚及交友を饗すへし元宵ハ客をもてなす事[illegible]
て楽ぶへし豊約ハ其心に随ふへし主人乃[illegible]

客と竟敬して饗奠とのむへうしに又酒盃にて
穂と先つへうす又酒と引ゝ盃をくん酒今
先乳と及屠うしに世伝説戯男女と饗とろ小皆先
と掬ぐ淫楽を強しむ人情と通ぐ世宣とをうる
数ようしろ巳して俗ようをくんとたくん平ぎ葬
猥褻楽たどを方所たりくん
三月天まうくはもしあと屋宅と家を作り破掃
と修造し或茅屋と葺改板屋と修葺とへし
三月治屋に新年と田家暦を記り
七月菜蔬花草菜苗と植へし或作と菊苗三月

初又八中旬ようえてしもれハ行ゝくえり蕪
荀瓜蜀黍玉蜀黍蕎麦烏芋豌豆豆豆豌豆菜豆扁
豆赤小豆刀豆胡麻薑眉児豆黍石竹地黄蓮藤子
荊芥香薷たど七月の節のうで先うもくくよ
紅豆ゝ三月の中より初く種とて又月の宜まて
やりゝ七月ゝ八月実のるる久し地蒙泥たり西い
まるかりうめし元菜蔬とうゆうくんしろ記ようろ
しうるれバ先ゝやまく実のり屋ゝ陽家盛りの
うゆへりゝ又ゝの泥乳八乾暖にりて延速のか
なくし又七月末と掃へ梘橘柑橘香橼乃新ゝ

清明の後に持てゝ月令廣義に云ふ
もろさ蕨とれむして原とうきゃぜはるかしきはめて
かゝり原と洗そて又日にほし收置べし食とる時
湯にひたしてつぎ用ゆ或ゝ煮て用ゆる也
新書に曰ゆるり或堀淹にして置べし垣蕨八月
まうされいんとなる垣蕨八月やもて干蕨を
黙ぐさ伽に用ひさし又蕨も狗脊も垣淹
元祿のはじめ比叡山の後七十又日を期とする
勢好り書に見て伽とる今世都鄙ひとしく桜花を
賞する後六十日と云ふ暫し彩す春秋八月中

なり出で三月の後六十又日を云ふ花候こゝ年
乃意腦にしり山上にしりてをこり遠近の
ゝ大やうたがひ高良京都の八重桜をひらく
桜二十日あまりおそし奥ふと云ふ山の上八重櫻
より彩候をおくること一旬二旬或一月也
仁和寺桜八洛中より早く彩る旦桜
を仁和寺乃ぶりてをこりこと
世月小蒜及雞子と食べし又禽獸乃腦と食
事なりし出蘇獐麻肉と食べしと凍蒟とこんぶ
瘡毒梅瘡と彩る也と云ふ月令廣義に出

孫をつくりて生と殺とをつくして天道小作(バイ)をもちくる事命と延し也百姓のん英の花菜と合せ物なり
亀鼈と合せ化せざれば家疾を為す
三月乃古候弟一桐始華 才二田鼠化為鴽 弟三虹始見 大清明の三候なり 弟四萍始生 才又呼鳩拂其羽 才六戴勝降于桑 右穀雨乃三候なり
清明八屋又十二刻十分夜四十七刻又十分穀雨七屋五十四刻十分夜四十五刻五十分 月令廣義

日本歳時記巻之三畢